

伝仙幢寺跡発掘調査報告

—津市芸濃町—

2022（令和4）年3月

三重県埋蔵文化財センター

例　言

1. 本書は三重県津市芸濃町に所在する伝仙幢寺跡の工事立会による埋蔵文化財調査報告書である。
2. 工事立会は自然災害防止県事業（割石地区）に伴い、三重県教育委員会が三重県農林水産部から依頼を受けて実施した。整理作業の経費は三重県農林水産部から執行委任を受けた。
3. 工事立会の体制等は次のとおりである。

調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課 主幹 角正芳浩、技師 橋口太地
調査期間 令和2年6月10日～9月23日
調査面積 3 m²
4. 本書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査研究1課が担当し、編集・執筆は橋口が行った。
5. 遺構および遺跡周辺の写真撮影は橋口が行った。
6. 調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

凡　例

1. 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1：25,000地形図「標本」、県共有デジタル地図（平成29年測図）等を基にしている。
2. 調査地点位置図は、三重県総合事務組合管理者の承認を得て、同組合所管の「2017三重県共有デジタル地図（数値地形図2500（道路線1000）」を使用し、調整したものである。（承認番号：令和3年4月5日付三総合地第1号）
3. 方位は、平面座標系第VI系における座標北を使用している。
4. 標高は、東京湾平均海水面（T.P.）を基準としている。
5. 土層及び遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行の『新版標準土色帖（19版）』による。
6. 遺物写真図版は、縮尺不同である。

目 次

第Ⅰ章 前言	1
1 調査に至る経緯	
2 調査の方法	
3 文化財保護法等にかかる諸手続	
第Ⅱ章 位置と環境	3
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
第Ⅲ章 調査の成果	6
1 周辺地形	
2 石積の調査	
3 周辺の状況	
第Ⅳ章 結語	8

挿図目次

第1図 調査地点位置図	2
第2図 遺跡分布図	5
第3図 調査地点平面図	7
第4図 石積立面図	7
第5図 野呂氏館跡の石積	8

写真図版目次

・写真図版 1 (調査前状況)	伝仙鷲寺跡遠景 (東から)、石積の調査前状況 (東から)
・写真図版 2 (遺構)	石積検出状況 (東から)、石積の傾斜 (南から)
・写真図版 3 (周辺状況)	伝仙鷲寺跡周辺の石仏・石塔 (西から)、矢穴のある自然石 (西から)
・写真図版 4 (表探遺物)	伝仙鷲寺跡周辺で表探した山茶椀、伝仙鷲寺跡周辺で表探した常滑焼

第Ⅰ章 前言

1 調査に至る経過

(1) 工事の概要

伝仙幢寺跡は三重県津市芸濃町小野平に所在する遺跡で、安濃川中流域右岸の丘陵根に立地する。

津農林水産事務所では、三重県津市芸濃町小野平を流れる安濃川右岸支川の溪流において、自然災害防止事業に伴う谷止工および流路工をおこなっている。当該溪流は溪岸の浸食が進行し、流出した土砂が下方に接続する農業用水路に被害が発生している。このまま放置すれば、浸食の増大が新たな山腹崩壊につながる危険が高まっているため、流路工を施工し下流保全対象の安全を確保すべく工事を進めていく。

この事業地内には、周知の遺跡である伝仙幢寺跡が存在する。事業の対象となっている小溪流は遺跡内を西から東へ流れている。工事車両進入路を確保するために遺跡内の石積の現状変更と撤去をおこなう必要が生じた。これを受け、津農林水産事務所と協議をおこない、撤去・現状変更がされる石積の工事立会による記録保存調査をおこなうこととなった。

(2) 調査の経過

調査は令和2年6月10日から断続的に測量調査や工事立会をおこない、同年9月23日に終了した。その後、令和3年に入り遺跡範囲や周辺環境の再確認をおこなうため、追加の踏査をおこなった。

調査日誌（抄）

令和2年

6月10日 調査開始 工事車両進入路の伐根。

6月12日 測量調査 石積図化。写真撮影。

6月16日 測量調査 石積断面図化。周辺踏査。

9月23日 工事立会 石積撤去後内部構造観察。

令和3年

3月18日 追加の周辺踏査 土器表採。

2 調査の方法

調査では、撤去・変更される石積の図化および石積周辺の平面図作成をおこなった。石積の前面には土砂が堆積していたため、バックホウと人力でこれを除去した。調査対象となったのは、工事車両進入路を確保するために撤去および現状変更がなされる部分であり、延長は5.5mを測る。調査前に地表から露出していた石積の高さは0.7mほどであったが、表面の土砂や落ち葉を0.7mほど取り除いた状態で立面図と断面図を作成した。遺構実測図は、全体平面図は1:100で、石積の立面図と断面図は1:10で作成した。

調査における遺構写真等は、基本的にニコンD3300を用い、補助的にコンパクトデジタルカメラを用いて記録した。

3 文化財保護法等にかかる諸手続

工事立会にかかる調査と併せて踏査による遺跡範囲の確認をおこなったところ、仙幢寺に伴うとされている「千度坊の十五体地蔵」が周知の遺跡範囲外に位置することが判明し、伝仙幢寺跡の範囲が北西側へ広がることがわかった。これを踏まえ、三重県教育委員会は津市教育委員会と協議の上、伝仙幢寺跡の範囲変更をおこなった。なお、三重県教育委員会が遺跡の存在について現認していることから、文化財保護法第94条に基づき埋蔵文化財包蔵地の周知の手続きをおこなった。

文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護

条例第48条第1項にかかる通知

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」

・令和2年5月14日付 津農第269号

（県教育長あて県知事通知）

文化財保護法第100条第2項

「埋蔵文化財の発見・認定について」

・令和3年3月23日付 教委第12-4432号

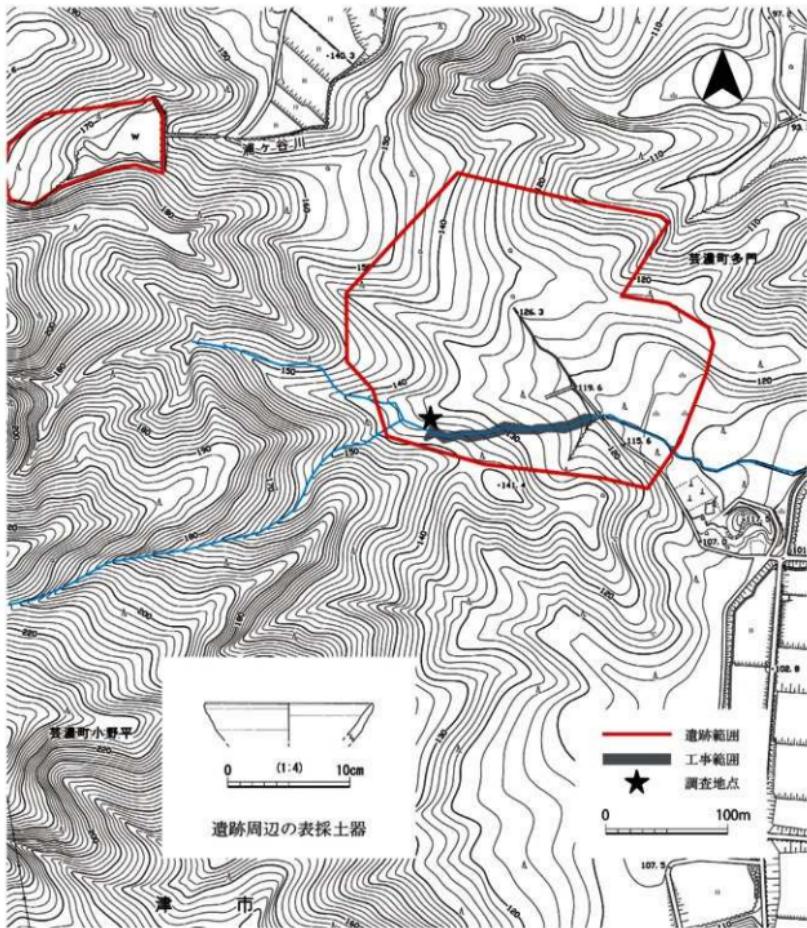
(津市警察署長あて県教育委員会教育長通知)

周知の埋蔵文化財の範囲変更

「周知の埋蔵文化財の範囲変更」

・令和2年7月31日付 教理第111号

(県教育長あて県埋蔵文化財センター所長通知)



第1図 調査地点位置図 (1:4,000、三重県デジタル共有地図)

第Ⅱ章 位置と環境

1 地理的環境

伝仙幢寺跡（第2図-1）は、三重県津市芸濃町小野平に所在する遺跡で、安濃川中流域右岸の丘陵根に立地する。津市芸濃町は三重県の中央部に位置し、町内に鈴鹿山脈錦杖ヶ岳付近を水源とする安濃川が流れる。遺跡の西側には基盤岩である花崗閃綠岩や一志・奄芸層群からなる丘陵が迫る。

2 歴史的環境

縄文時代

伝仙幢寺跡が位置する安濃川中流域の北半から奥部にかけての地域では、右岸の北奥遺跡（第2図-2）、梶田遺跡（同3）、雲林院青木遺跡（同4）、興遺跡（同5）で縄文土器が出土しているほか、対岸の大石遺跡（同6）では中期後半の資料がまとまって確認できる。

弥生～古墳時代

馬屋町遺跡（同7）、梶田遺跡（同3）、柏井戸遺跡（同8）、多門遺跡（同9）など中期から後期の遺跡が多く確認されている。梶田遺跡では三河や伊賀・近江といった地域と強い共通性をみせる土器が出土しており、遠隔地との交流が窺える¹¹⁾。

古墳時代には安濃川下流域や中流域南半に位置する遺跡の多くでは人間活動が活発化する様子が読み取れる。一方で、中流域北半から奥部にかけての地域では遺跡数はほとんど増加せず、安濃川中流域の中でも地域差がみられる。古墳については宮谷古墳群（同10）、東山古墳群（同11）、塙ノ上古墳群（同12）、荒堀古墳（同13）、竹ノ内古墳（同14）などが確認されているが、副葬品の詳細は不明である。いずれでも横穴式石室を主体部に持つ小規模な円墳が多くを占め、古墳時代後期から終末期に属するものとみられる。

奈良～平安時代

椋本南方遺跡（同15）、松山遺跡（同16）、北奥遺

跡（同2）では奈良時代から平安時代にかけての遺構・遺物が出土している。松山遺跡では鈴鹿駅家と伊勢神宮方面を結ぶ官道（伊勢道）に関連すると考えられる道路遺構が検出されている²¹⁾。北奥遺跡では平安時代前期の強い規格性を有する建物群が確認されており、10世紀から11世紀にかけては京都系の土師器が出土している。『四天王寺文書』の『民部田所勘定注』に記載された忍田里や無消里は、現在の忍田や多門から中瀬古にかけての一帯と考えられており³⁾、遅くとも平安時代初期には安濃川中流域奥部の低位段丘の開発が進んでいたことが窺える。

中世

美濃夜神社所蔵の寛元2（1244）年の棟札には忍田・雲林院・生原・椋本の地頭名が確認でき、各村に有力な領主が存在していたことが読み取れる。『神鳳抄』では当遺跡が位置する「小野平」の地名がみられ、御厨として内外両宮へ上納していたことが知られている。「千幡寺」の地名もみられ、「仙幢寺」を誤記した可能性がある⁴⁾。

集落遺跡としては、忍田松山遺跡（同17）、松山遺跡（同16）、野垣内遺跡（同18）、巾遺跡（同19）、下川遺跡（同20）、北奥遺跡（同2）が確認されており、低位段丘の開発が進んだことが窺える。下川遺跡からは鉄滓や輪羽口が確認されているほか¹²⁾、北奥遺跡では中国銭や花押が線刻された硯が出土している¹³⁾。これらの遺跡は当地を本拠地とした雲林院氏との関連が指摘されている。下川遺跡の丘陵上には雲林院氏の舘城である雲林院城跡（同21）がある。その東麓には「堀」や「陣屋」といった地名が残っており、居館群の存在が想定される。雲林院氏やそれらに関連する城館としては前山城跡（同22）、野呂氏館跡（同23）、北浦城跡（同24）がある。特に野呂氏館跡は発掘調査がなされており、建物遺構の他、井戸や蒸風呂とされる遺構が検出された。

雲林院氏は安濃郡を中心に活動した国人領主の長野氏の一族である。長野氏は鎌倉時代末から南北朝時代頃に伊勢国に入ったと考えられている¹⁴⁾。雲林

院氏については、『満済准后日記』の正長2（1429）年の記載によると、幕府に対し反乱を起こした国司北畠満雅を討った長野氏と雲林院氏に北畠氏の旧領が与えられていることがわかる。また、永禄4（1561）年の雲林院藤泰の寄進状が残されており、戦国時代末期における同氏の知行地の範囲が窺い知れる⁷⁾。長野・雲林院両氏は戦国時代末期にはそれまで対立していた北畠氏の勢力下に吸収され、織田信長の伊勢侵攻によって事実上滅亡する。

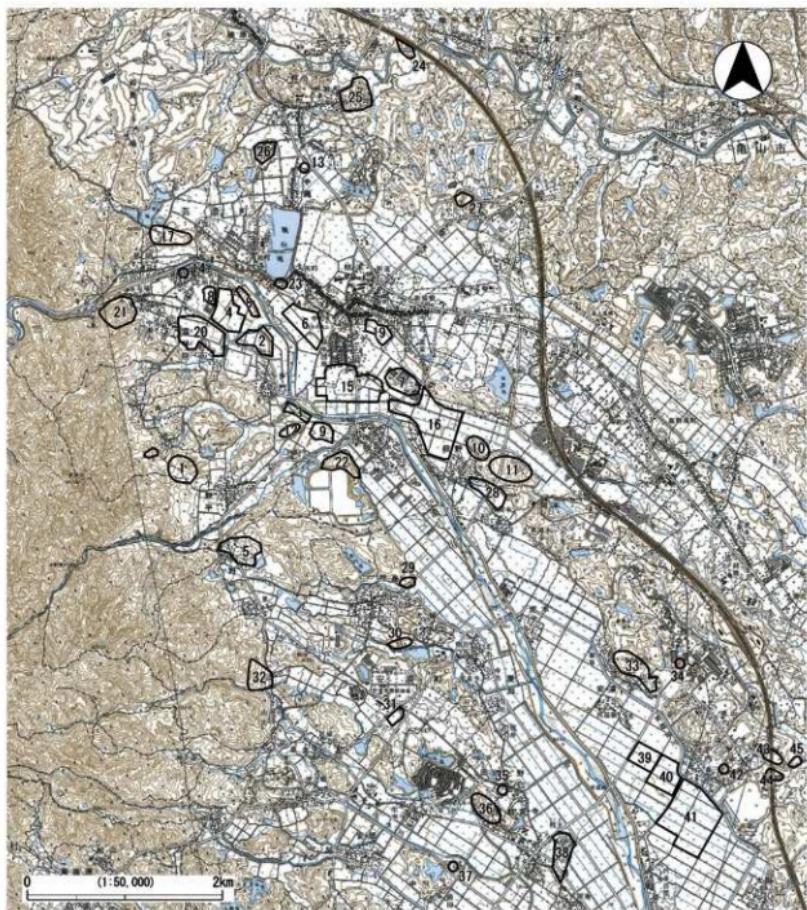
今回調査した伝仙轄寺跡は長野氏の一族菩提寺として雲林院氏との関係が深いとされる⁸⁾。雲林院入道に宛てられた『北畠天祐書状』の中にも仙轄寺の記述がみられ、16世紀前半までは存続していたことが読み取れる⁹⁾。また、今回の調査地点の付近には石造仏が複数体確認できる。いずれも仙轄寺の参道と考えられる山道沿いに位置しており、特に「千度坊の十五体地蔵」は高さ3.2m、幅3.3mを測る自然石に15体の地蔵尊が彫り込まれている（写真1）。戦国時代から江戸時代にかけての彫像であり¹⁰⁾、仙轄寺の門跡として伝わっている¹¹⁾。

註

- 1) 伊藤裕偉編2006『安濃川中流域の考古資料』三重県埋蔵文化財センター
- 2) 昭和62年度三重県教育委員会調査
- 3) 仲見秀雄1979『庵芸・安濃・一志郡の条里制』『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版
- 4) 芸濃町教育委員会編1986『芸濃町史』上巻
- 5) 三重県埋蔵文化財センター編1990『伊勢寺魔寺・下川遺跡ほか』
- 6) 稲本紀昭1984『伊勢国国人長野氏関係資料』『三重大学教育学部研究紀要』第35巻
- 7) 『農業館微古館文書』（前掲註5に掲載）
- 8) 浅生悦生2017『知られざる郷土史、津とその周辺』
- 9) 稲本紀昭1987『波多野貞雄氏所蔵文書について』『三重県史研究』第3号 三重県
- 10) 竹田憲治氏のご教示による。
- 11) 芸濃町中央公民館2005『芸濃町の石造物』



写真1 千度坊の十五体地蔵



1. 伝仙輪寺跡
2. 北奥遺跡
3. 梶田遺跡
4. 雲林院背古遺跡
5. 興遺跡
6. 大石遺跡
7. 馬屋町遺跡
8. 梶井戸遺跡
9. 多門遺跡
10. 宮谷古墳群
11. 東山古墳群
12. 城ノ上古墳群
13. 荒堀古墳
14. 竹ノ内古墳
15. 榊本南方遺跡
16. 松山遺跡
17. 忍田松山遺跡
18. 野垣内遺跡
19. 巾遺跡
20. 下川遺跡
21. 雲林院城跡
22. 前山城跡
23. 野呂氏棺跡
24. 北浦城跡
25. 林城原敷城跡
26. 林城山城跡
27. 榊本城跡
28. 赤坂遺跡
29. 山ノ下古墳群B支群
30. 大塚古墳群C支群
31. 東相野遺跡
32. 朝日山古墳群
33. 安濃城跡
34. 東谷古墳群
35. 東綱音寺赤塚古墳
36. 日野丘遺跡・古墳群
37. 前田1・2号墓
38. 多倉田遺跡
39. 柳垣内遺跡
40. 石名田遺跡
41. 小ブケ遺跡
42. 谷古墳
43. 宮ノ裏B遺跡
44. 内多馬塙A遺跡
45. 内多馬塙

第2図 遺跡位置図 (1:50,000) (国土地理院1:25,000「捺本J」)

第III章 調査の成果

1 周辺地形

本遺跡は安濃川右岸の丘陵裾部に位置し、標高は120m前後である。遺跡内の標高は丘陵側にいくにつれて上昇し、調査地点周辺には石積が斜面に沿つて幾重にも巡らされている（写真図版1）。現況としては山林となっているが、石積に伴う平坦面が棚状に広がっており、寺院あるいは耕作に起因する地形の改変が確認できる。

2 石積の調査

（1）石積の規模

今回の工事立会では石積の調査を中心におこなった。調査対象となったのは、谷止工に伴い撤去および現状変更がなされる部分であり、延長は5.5mを測る。調査前に地表から露出していた石積の高さは0.7mほどであったが、表面の土砂や落ち葉を0.7mほど取り除き、高さ1.4mの状態で立面図を作成した（第4図）。

撤去対象の石積は南半の延長1.8mであり、撤去作業の際にバックホウを用いてさらに1.1mほど地面を掘削したところ、石積の前面に堆積していた客土と地山の境界が検出され、石積の高さの総計が2.5mを測ることが判明した。

（2）石積の構造

使用されている石材は花崗岩系の自然石であり、矢穴が残るものはみられなかった。石材の大きさは概ね3種類に分類され、20cm前後で小面（石垣の石材の表面）が正方形を呈する小型石材、長辺が40cm以上で小面が長方形を呈する中型石材、長辺70cmを超える大型石材がみられる。石積上端から70cmの範囲では小型の石材が多く、それより下では中型から大型の石材の使用頻度が上がる。

石積はいわゆる野面積みであるが、石積の上半と下半で積み方がやや異なる。小型の石材が多く使用された上半部では、石材を斜めに落とし込む谷積み（落とし積み）が用いられている¹⁾。一方、中型から大型の石材が用いられる下半部は乱積みが中心と

なるが、部分的に横目地が通る箇所も見受けられる。石積の傾斜は、上半部は70度ほど傾斜を持たせて積まれているのにに対し、下半部は地面とほぼ垂直に石材が積み上げられている。

以上のように、石積の上半と下半では石材の大きさや形状、積み方、傾斜などの点で差異がみられる。このことから、これらは異なる時期に積まれたものであり、少なくとも1回以上は積み直しがされている可能性が高い。

なお、地山を検出するまで掘削したところ、石積の基底石は地山直上に添えられており、裏込め石等は確認できなかつた。

3 周辺の状況

（1）矢穴のある自然石

工事立会に伴い、調査地点周辺の踏査をおこなった。調査地点に周辺には全長1mを超える自然石が多く分布する。これらには矢穴が見受けられるものがある（写真図版3）。矢穴の長径は5.5cm、短径2.5cm、深さ6cmを測り、森岡秀人氏と藤川祐作氏による矢穴分類のCタイプに属する。Cタイプは18世紀後半以降に普及する型式であり²⁾、仙幢寺が廃された後の矢穴痕である可能性が高い。

（2）表探遺物

調査地点を流れる溪流を200mほど上流へ進んだ地点では山茶碗や常滑焼の甕の破片を表探した（写真図版4）。山茶碗は藤澤良祐氏による編年の中第8～9型式に該当し、13世紀後半から14世紀に位置付けられる³⁾。その付近には石仏や石塔も確認でき、付近に中世の墓域があったことが窺える。

註

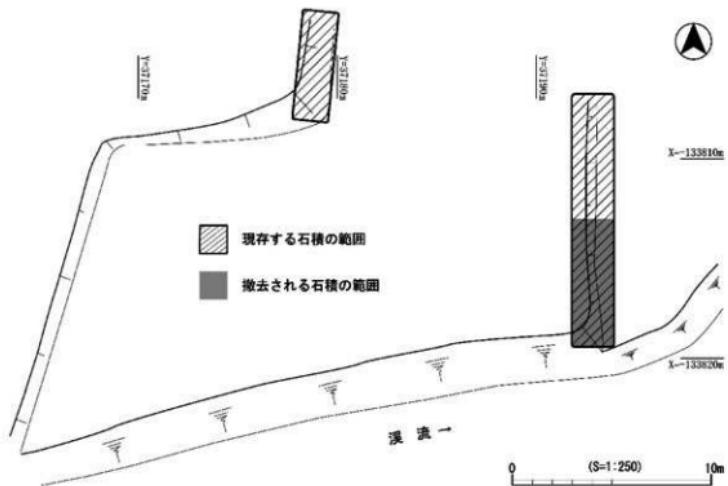
1) 北垣聰一郎1989『石垣普請』法政大学出版局

2) 森岡秀人・藤川祐作2008『矢穴の型式学』

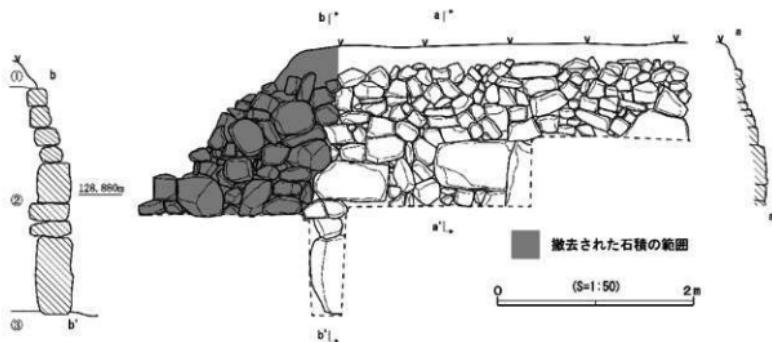
『古代学研究』180号 古代学研究会

3) 藤澤良祐1994『山茶碗研究の現状と課題』『研究紀要』

第3号 三重県埋蔵文化財センター



第3図 調査地点平面図 (1:250)



土層 ①: 表土 (高麗土) ②: fine 10YR 6/4 に近い黄褐色砂 ③: fine 2.5Y 5/1 黄灰砂 (地山)

第4図 石積立面図 (1:50)

第IV章 結語

伝仙幢寺跡は安濃川右岸の丘陵裾部に位置し、安濃郡を中心に活動した国人領主長野氏の一族である雲林院氏との関係が深いとされている。当遺跡の北側には雲林院城跡の他に、中国鏡や墨書きが出土した北奥遺跡、鉄滓や輪羽口などの鐵冶関連遺物が出土した下川遺跡などの中世に属する遺跡が多く確認されており、当地を雲林院氏が本拠としていたことが窺える。

今回の調査では石積周辺からは遺物は出土せず、中世の年代を示す資料を得ることはできなかった。石積については、石材の大きさや積み方の差異から積み直しが少なくとも一回以上おこなわれたことが判明した。新たに積み直された上半部分は70度ほどの傾斜を持たせた谷積み（落とし積み）を採用しており、近世以降の築造と考えられる。

これに対し、下半部は40cm以上の大型から中型の石材を垂直に積み上げており、控えも30~40cmと上半部と比べてやや深い。伝仙幢寺跡から北東1kmの距離に位置する野呂氏館跡でも15~16世紀に位置付けられる石積SX5やSA14・15が検出されている¹⁾。これらの石積も40cm前後の石材を用いており、ほぼ垂直に積み上げている点で伝仙幢寺跡例と共通性がみられる。一方、野呂氏館跡ではみられない70cm以上の大型石材が伝仙幢寺跡では利用されており、

これらは最大面が小面にくるように据えられている。強度や安定性よりも高さや見栄えを重視した据え方が採用される点は特筆すべきであり、石積の性格が野呂氏館跡とは異なっていた可能性が考えられる。

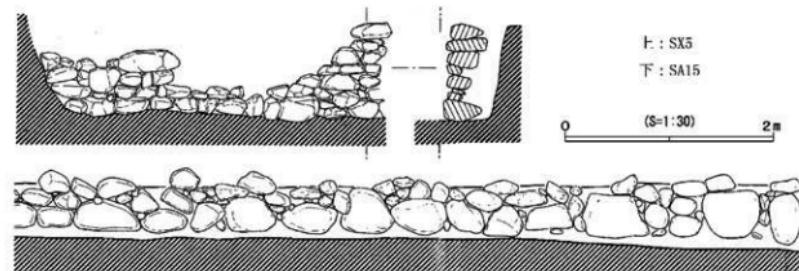
以上と併せて文献から読み取れる雲林院氏の活動期間や仙幢寺の存続期間を踏まえると、今回調査した石積下半部の築造年代が15~16世紀まで遡り得ることが指摘できる。

周辺の状況としては、中世陶器の表採や石仏・石塔の分布から、中世の墓域であることが踏査の結果判明した。また、山中一帯には矢穴が穿たれた自然石が多くみられ、字名の「割石」にもある通り、近世以降は石切り場として利用されていたことが窺える。

今回は谷止工事に伴う立会調査であり、限られた範囲の中での調査となった。伝仙幢寺跡の全体像や寺院の伽藍配置など、詳細については未確認のところが多い。今後の調査の進展により新たな知見が得られることを期待したい。

註

- 1) 田中喜久雄他1984『野呂氏館跡発掘調査報告』
芸濃町教育委員会

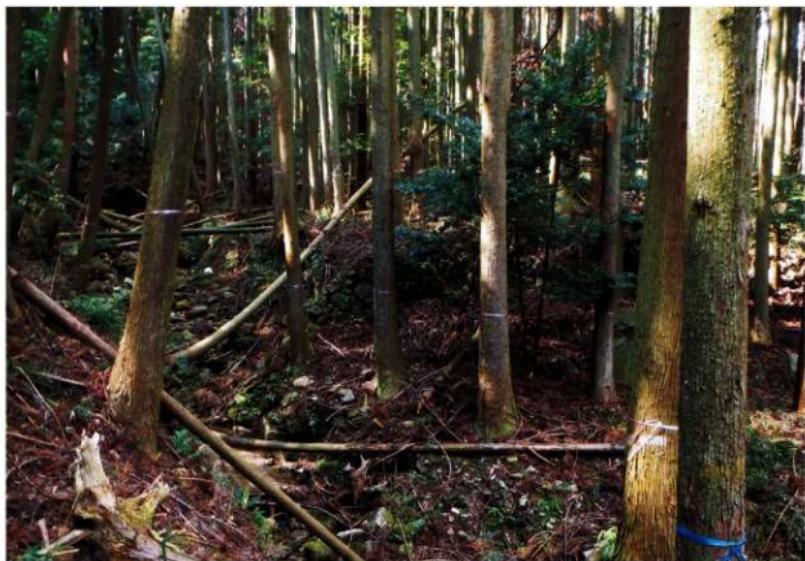


第5図 野呂氏館跡の石積（註1文献）

写真図版 1 (調査前状況)



伝仙幢寺跡遠景（東から）



石積の調査前状況（東から）

写真図版 2 (遺構)



石積検出状況（東から）



石積の傾斜（南から）

写真図版 3 (周辺状況)



伝仙幢寺跡周辺の石仏・石塔（西から）



矢穴のある自然石（西から）

写真図版4（表採遺物）



伝仙幢寺跡周辺で表採した山茶碗



伝仙幢寺跡周辺で表採した常滑焼

報告書抄録

三重県埋蔵文化財調査報告 408

伝仙幢寺跡発掘調査報告
～津市芸濃町～

2022（令和4）年3月
編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 共立印刷株式会社

